

[体育・保健体育]

小学校入学期における「よりよい学習集団づくり」を 目指した体育授業

—小学校1年生のボールゲームの実践を通して—

小倉 基*

1 主題設定の理由

休み時間の体育館やグラウンドは、生き生きと遊びに没頭する子どもたちであふれている。鉄棒や肋木、一輪車などで巧みな動きを身に付けている子どももいれば、「ごっこ遊び」で友達との交流を楽しんでいる子どももいる。遊びには楽しみだけでなくトラブルもつきものである。言葉にならない思いが溢れて、手が出てしまったり、些細なことで口論になったりすることもある。このように、子どもだけの遊び社会は仲間関係もルールも常に変化しうる流動的な場であり、トラブルや不適応も生じやすい。また、なかには興味や関心の赴くままに行動したり、情動のコントロールが出来ず、集団行動を行えなえなかつたりする子どももいる。

盛真由美ら(2008)は「自己コントロールと基本的な生活習慣の習得度が悪いと適応が悪くなる。友達との関係をよくすることや学業への自信をつけさせることが学校適応を向上させる要因である。」*1と示唆している。小学校に入学すると多様なコミュニケーションの場が増える。思う存分新しい仲間との遊びを楽しみ、「できた、分かった」と学習の成就感を感じながら、1年生の子どもたちは新しい環境に順応していく。

馬場(1999)は「現代の子どもたちの遊びの問題点は集団遊びの減少である。子どもは集団で遊ぶ中でルールを守る精神や協調性、忍耐力を身につけていく。」*2とし、子どもたちが群れて遊ぶことの重要性を指摘している。自学級の子どもの実態も、集団遊びはするものの、優しい言葉をかけ合ったり、遊びに新たな友達を誘ったりするといった姿があまり見受けられない。様々な仲間と群れる遊びは、弱者への思いやりや仲間に対する憧れ・尊敬の気持ちなども育む。遊びの中で群れることをあまり経験していないことは、対人関係能力を養う絶好の機会を逸していることになる。

小学校に入学したばかりの子どもたちは、まず授業という学びの形態や学校の環境、多人数の仲間との集団生活に適応していくいわゆる「小1プロブレム」の克服から始まる。小学校入学時期の不適応に関する先行研究から、保育園・幼稚園と小学校の違いに戸惑う子どもが、何に不安を感じどのように気持ちを変容させているかを探りつつ、個々の支援をすることの重要性を感じた。低学年の体育科の領域は、「遊び」から「学習」に移行する。体育科授業を活用した学校・集団適応の取組みは、その点において理にかなっているといえる。子どもが安心して自信をもって力を発揮でき、個々の力量を確実に高める体育学習の展開を目指し、ひいては孤立や不適応を起こしがちな子どものスムーズな学校・集団適応の実現につなげていく。

入学期の子どもの学校における集団適応を向上させるには、体育科の授業を通して、幼児期の「遊び」から「学習」への段差を埋める指導法が有効ではないかと考える。本研究では、「よりよい学習集団づくり」につながる入学期の体育科の学習活動の在り方を探っていく。単元実施前の子どもの適応度を把握し実施後の変容をとらえ、学校における集団適応過程の様相をつかむことで指導の有効性を実証していく。

本稿で述べる「よりよい学習集団」を、「個々が学級を居心地のよい場所と感じ、他者と良好なかかわり合いをもちながら意欲的に学ぶ集団」と規定する。

2 研究の目的

本研究は、幼児期・入学期の子どもの集団適応度と体育的な課題を分析し、体育授業においてかかわり合いを意識した活動を仕組み個々の運動能力を高めていくことが、「よりよい学級集団」をつくりあげることの有効であることを検証する。

* 小千谷市立東小千谷小学校

3 研究の内容と方法

(1) 幼稚園・保育園での実態調査に基づいた幼児教育における遊びの分析

① 「遊び」から「学習」への変化

現行の小学校学習指導要領・体育科改訂の趣旨には、「体を動かすことは、身体能力を身に付けるとともに情緒面や知的な発達を促し、集団的活動や身体表現などを通じてコミュニケーション能力を育成すること」と明記されている。^{*3}さらに、運動領域については、幼児教育との円滑な接続を図ることがあげられている。

校区の幼稚園・保育園における調査活動を通して、幼児期における「遊び」の実態や体育的な課題についてつかみ、小学校入学期における「遊び」から「学習」への段差を少しでも小さくしたいと考える。

幼稚園や保育園における「遊び」の種類を近隣の幼稚園・保育園に聞き取り調査したところ、以下のようである。

表1

(表1) 校区の幼稚園・保育園では遊びの種類に違いはあまり見られなかったが、2つの園の特徴として室内遊びが多く、運動能力の向上を意図した遊びが少ないことが分かる。したがって、小学校入学期には、「遊ぶ」の楽しさを大事にしつつ、ルールを伴って「学ぶ」学習活動へ緩やかに移行していくことが求められる。

指導者が、運動能力の向上を意図しすぎた過剰な体育授業は、子どもを体育嫌いにするだけでなく、学校・集団への不適応にもつながってしまう。

② コミュニケーション環境の変化

遊びの種類は年齢や男女によって特徴がある。3歳頃までは、道具を共有しようとしないう遊び方「並行遊び」が中心である。4歳頃になると次第に周囲にも関心が向けられ「協調遊び」に発展する。5～6歳では「集団遊び」が可能になり、少人数のグループでルールに則った遊びが可能になる。また、リーダーが出現するなどグループ内の役割を認識して行動できるようになる。男の子は自分がやりたいことを繰り返して挑戦し続けるのに対し、女の子はままごとなど集団の中で協調性のある遊びをする傾向もある。また職員への聞き取り調査から、「物の貸し借りや遊ぶ順番などの譲り合いができない」「友達との小さなトラブルが多い」「新たな遊びを見つけ出せない」といったコミュニケーション上の課題も把握できた。

小学校入学当初は、広い校舎や教室の中で自分の居場所を見つけられない子ども、多様な道具に慣れずいつまでも同じ道具を出して遊んでいる子どもがいる。大きな校舎や広い体育館などの物的環境への順応に困難を示す子どもも少なくない。幼稚園・保育園では、子どもたち自身で遊びを作り出すことに重点をおき、場所や道具など子どもたちの遊ぶ環境を整えている。小学校においても入学期は、周囲の人的環境や複雑な物的環境をより簡易化し抵抗感を取り去ってあげることで、「遊び」や「運動」への興味を広げ、集団適応が容易になるのではないかと推測する。

(2) 自学級の子どもの体育における実態 (1年生 男子18名 女子13名 計31名)

簡易なアンケートを実施し、体育学習や運動に対する子どもの意識調査を行った。

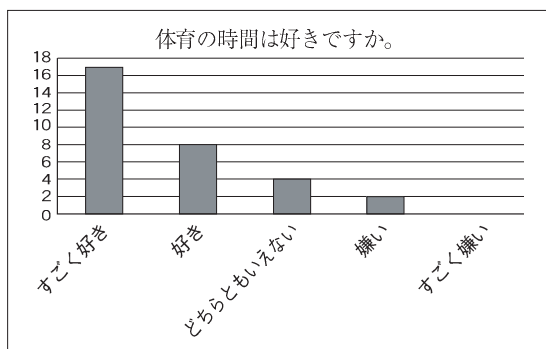


表2

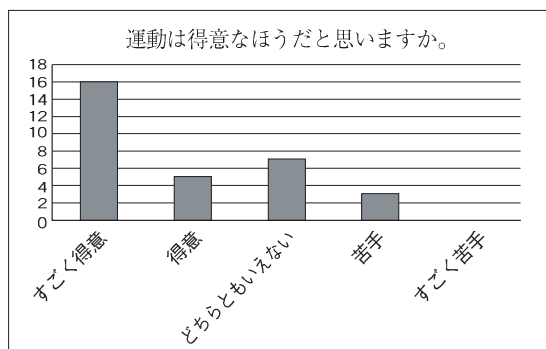


表3

① 関心・意欲について

○体育学習については、男女問わず、ほとんどの子どもが「すごく好き」あるいは「好き」と答えている。(表2)

○運動が得意かどうかに対しても同様の結果を示している。(表3)

② 体育学習における集団適応について

○意欲的に友達とかかわろうとする子どもがいる一方で、声をかけられるのを待っていたり、自分から行動をおこさない子どもがいる。

○運動の順番やきまりを守ったり物の貸し借りをしたりする場面でトラブルが生じやすい。

以上のことから、「運動の順番やきまりを守ったり、友達と仲良く運動をすること」や「集団的活動や身体表現などを通じてコミュニケーションをとること」を意識した体育指導を行うことが重要となる。

(3) 調査・実態分析に基づく体育指導の工夫

前項の調査・実態から、小学校入学期の子どもたちが感じている「段差」は、次のことが考えられる。

- ① 「遊び」から「学習」への変化（活動内容・ルール）
- ② コミュニケーション環境の変化（人的環境）
- ③ 教室・体育館の数や大きさ、学習用具の変化（校舎の物的環境）

中村（1999）は「子どもたちが、楽しく遊ぶためには「遊び時間」「遊び空間」「遊び仲間」という「3つの間」の条件が重要である。*4と述べている。小学校の体育学習も、時間的余裕のなさ、安全な空間の限定、友達とのかかわり合いの経験不足は解決すべき重要課題である。学習の（遊ぶ）ためにたっぷり時間をとれること、学習（遊ぶ）場所を自由に選べること、そしてその学習（遊び）と一緒に楽しめる様々な仲間の存在は、体育指導の基盤になる。

学校・学級・学習集団に「適応する」とは、小学校という新しい環境の中で安心して力を発揮することであり、子どもが感じている段差（不安）を軽減させることである。友達とのつきあい方を学び、良好な関係を築いたり学習への自信をつけたりすることが学校での集団適応を向上させる要因となる。

体育学習において、以下に示すA～Dの4つの指導上の工夫を行い、適応を困難にしている要因である「段差」の解消を試み、「よりよい学習集団」づくりを目指していく。

A 遊びから学習への段差の解消を意図したボールゲームの導入

本研究では「風船バレーボール」をゲームの中核として単元に仕組む。

① 「遊び」としての新鮮さ

幼児期にボールを用いた遊びがあまり行われていなかったことから、ボール運動は子どもたちにとっては新鮮である。どの子どもも同じスタートラインなので安心して活動に入ることができる。

② どの子どもも楽しめる単純なルール作り

ボールがさわれず参加できない、ボールにぶつくと痛い・怖い、失敗すると責められるということである。楽しさあつての規律、規律あつての楽しさである。単元の最初に「楽しいゲームにするための約束事」について話し合い、みんなで単純明快なルールづくりを行うことで、子どもたちが安心して学習に取り組むことができる。

③ 用具の工夫

ボールに対する恐怖心がある子どもも安心してボールに向かえるように、風船を使う。顔などに球が直撃してもケガなどの心配がなくバリアフリー性のある適度なスポーツである。風船の大きさや質量を変えることで、風船の落下速度を調節し運動能力の差やチームのまとまりの差などにも配慮する。

B 他者と安心してかかわれる手だて（グループの段階的な変化）

2人組、3人組と人数を段階的に変化させていき、運動の中で対人関係能力を養っていく。運動を一緒に楽しめる様々な仲間がいるという実感を子どもたちにもたせる。

・競争性のもつ楽しさや緊張感をより強調するために、チーム間で対戦する形式にする。また、いろいろなチームと対戦させることで様々な状況でゲームができるようにする。

・少人数のチーム（6～7人）を編成し、一人一人が活躍できる場を保障する。

C 子ども個々の不適応への対応

集団適応が難しい子どもについては、個々の段差（不安）の把握と分析、その場の状況に応じた指導を丁寧に行う。不適応の子どもをなおざりにせず、学習の途中であっても必要があれば一度活動を中断し、どうすればよかったかを全員に考えさせる。友達に対する好ましいかかわり方をボールゲームを通して学んでいくようにする。

D 発展的な運動技能の習得

授業の導入でボールを弾く、捕るといった運動を十分に経験させる。誰でもできる動きから始め、バリエーションを加えながら、動きを高めていくようにする。「できそうでできない」「がんばったらできそう」と思わせる課題を投げかけ子どもたちの意欲を高めていく。

4 実践の概要

(1) 体育学習での実践

単元名 ボールゲームを楽しもう (領域E ゲーム)

単元のねらい

- ① 簡単なボール操作やボールを持たないときの動きを身に付け、楽しくゲームをする。(技能)
- ② ルールを守り、互いに協力してゲームを行う。(態度)
- ③ ボールゲームの行い方を知り、楽しくゲームができる攻め方や守り方を見付ける。(思考・判断)

(2) 指導計画 (全4時間) ・主な活動 ◇評価

1	2	3	4
・準備体操 ・オリエンテーション 風船を落とさずにつなげよう。 ・いろいろなバリエーションで風船を弾く動作を行う。 ◇ボールを弾く、落下点に動くなど簡単なボール操作運動ができたか。	・準備体操 風船を使ったゲームをしよう。 ・チームに分かれ、簡単なゲームを行う。 ◇ボールを保持しているとき、ボールを保持していないときの動きはよかったか。	・準備体操 風船バレーボールをしよう。 ・チーム間でゲームを行う。 ・学習を振り返る。 ◇ルールを守り、互いに協力してゲームを楽しんでいたか。	・準備体操 風船バレーボールをしよう。 ・チーム間でゲームを行う。 ・簡単な作戦を立ててゲームをする。 ◇楽しくゲームができる攻め方や守り方を見付けることができたか。
指導上の工夫			
A-①, ②, ③ B D	A-②, ③ B	A-②, ③ B C D	A-②, ③ B C D

(3) 指導の実際

【第1時 風船を落とさずにつなげよう。】

- 2人組をつくり、風船を弾き合う運動をする。手、足、頭と体の部位を変えて風船を弾き合う。お互いに名前を呼び合いながら風船を弾くことで、相手を意識させるようにする。
- ペアは2回変更し、多様なかわりが生まれるようにする。1回目は近くの人と、2回目はあまり話したことがない人というようにして、ペアを組ませる。
- 3人組をつくり、手をつないだままで風船を落とさないように弾く運動を行う。手、足、頭ならどこで風船に触れてもよいようにし、風船を落としたり、手が離れたりした組はその場に座るようにする。

【第2時 風船を使ったゲームをしよう。】

風船飛ばし合戦

- バドミントンコートにネットを挟んで、2チームが向かい合う。自陣に15個ずつの風船を用意し、相手コートにネットの上を越して投げ入れる。1分間のうちに、相手コートに入った風船の数を競う。

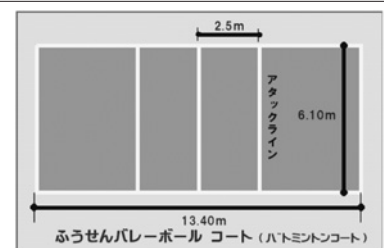
風船リレー

- 5つのチームをつくる。風船をバトン代わりにして、弾き、かつ、走りながらコーンを周り戻ってくる。コーンまでの距離は10mにし、途中で風船を落としても、落としたところから再スタートする。

【第3・4時 風船バレーボールをしよう。】

風船バレーボール

- 1チーム6～7人。
- バドミントンコートを使用する。
- 自陣の全員がボールに触れた後でなければ、相手のコートに返すことができない。
- サーブは点を取ったチームがアタックラインより後ろから行う。
- 試合は5分間とし、得点の多いチームの勝利となる。



A 遊びから学習への段差の解消を意図したボールゲームの導入

① 「遊び」としての新鮮さ

第1時には2人組をつくり、風船を弾き合う運動を行った。風船を弾くという遊び自体を経験したことのある子どもが少なく、活動終了後には汗びしょりになって、息をはずませている子どもがほとんどであった。活動中に夢中になって「次はどんな運動をするんですか!」「頭でやりたい!」という声も届いてきた。手、足、頭など体の部位を変えて風船を弾き合うことで子ども達に新鮮な「遊び」の感覚を味わわせることができた。

② 楽しいゲームにするためのルール作り

表4

単元を通して守る大事な約束(ルール)を3つ設定した。(表4)

- | |
|---------------------|
| ●声を出して風船をわたそう。 |
| ●風船から目をはなさないようにしよう。 |
| ●はげます言葉をかけよう。 |

第1時はお互いの名前を呼び合いながら、ボールを弾き合っている子ども達の姿が見られた。しかし、第3時の風船バレーボールではコート上の仲間に声をかけ合う姿はあまり見られなかった。これは、勝負にこだわり競技に夢中になったためと推測される。単元後半は、名前は呼び合わなくても「はい」という声を出すなど、多様なかけ声を発する子ども達も現れた。

試合を終えた後、1度はボールに触れることができたかと質問したところ、全員の手があがった。これは、風船から目をはなさないようにしようという意識の高まりであり、風船バレーボールのルールが子ども達一人一人に浸透している証拠である。ゲーム当初は、全員がボールに触れる前に相手のコートに返していることもあったが、第4時になると、風船を上の方に弾き、仲間につなげようという動きの変容が見られた。

友達が良いプレーを見せたり、得点したりすると「すごい!」「いえーい!」と歓声が響く。その一方で、失敗したり、点を取られたりすると黙り込んでしまったり、はげます言葉をかける子どもがいなかった。そこで、競技を一時中断し、どんな言葉をかけてもらったら安心するかを考えさせた。「『いいよ』『大丈夫だよ』と言います」と子どもなりにどうしたら失敗をカバーし合うことができるかを考え、チーム内で励まし合うことの大切さを学んでいた。

③ 用具の工夫

滞空時間が長く、軽くて柔らかい風船を用いたことで子どもたちは安心して風船に向かうことができていた。第1時に人数分の風船を用意して見せたときに「わあ」と歓声があがったことから風船に対する子どもたちの興味がうかがえる。風船の色も様々で、子どもたちの「やってみたい」という気持ちを視覚的な面からも起こさせたと推測する。

第4時に行った風船バレーボールでは市販の風船よりも大きなもの(直径60cm)を使い、さらに、風船の中に鈴を入れた。理由は落下速度を調節するためと、風船への注意を促すためである。第3時は、風船の滞空時間が長かったため活動が間延びしてしまった。そこで鈴を入れたが、今度は落下速度が上がったためラリーが続きにくくなった。しかしながらその適度な抵抗感が子ども達の意欲を一層喚起した。

B 他者と安心してかかわれる手だて(グループの段階的な変化)

2人組を作ろうというときに、「一緒にやろうよ」と積極的にかかわろうとする様子が見られた。また、3人組を作る場面では最後に余ってしまった子どもに対して、「入っていいよ」と声をかけていた。肯定的に多様な他者とかわるなかで、運動と一緒に楽しめる仲間がいることを感じ、どんな子に対しても温かく受け入れる素地ができてきたといえる。こうした声掛けが安心感を生み、伸び伸びと思い切り運動できる雰囲気を作り出した。第3・4時ではチーム間で対戦する形式にしたことで、ゲームのもつ楽しさや緊張感をより強調することができた。1年生にとって、競争や勝負事は経験が少なく、負けたときの悲壮感を感じることもあったが、前述した互いの声かけがあったり、どのチームも試合において1回は勝つことができたので、チームで勝負を争う楽しさも味わっていた。

C 子ども個々の不適応への対応

練習中や試合中に、チームから外れてしまう子どももいる。個別に話を聞き、個々の子どもが感じる段差(不安)を埋めるよう配慮し参加を促した。学習を一時中断し全体の中で確認することも行った。不適応の子ども自身の問題だけでなく、周りの仲間にも責任があることを伝えた。子どもそれぞれが居場所を感じ当事者意識を全員がもつ。単元後半は、他チームを「がんばれ!」と応援したり、良いプレーに対して拍手をする姿も多く見られるようになった。

D 発展的な運動技能の習得

第1時では、風船を弾く動作に慣れていない子どもは投げるようにして、友達にパスしていた。一度空中に投げ上げてから風船を弾くようにすると正確にパスすることができるということを個別に指導したところ、ねらった所に風船を弾くことができるようになった。第1時が終わった後に、「休み時間も風船で遊びたい」「もっとやりたい」という声が

届いてきた。第3・4時のゲームでは練習してきたことを活かしてサーブを上手に決める子どもも現れた。単元の最後に書いた感想には「さあぶがうまくいって、うれしかった」と記述していた子どももいた。

5 考察

A「遊びから学習への段差の解消を意図したボールゲームの導入」…遊びから学習への段差を解消するような運動やルールを取り入れたり、子ども達の実態にあった用具を工夫し・活用したりしたことで発達段階に応じたボールゲームを行うことができた。

B「他者と安心してかかわれる手だて（グループの段階的な変化）」…単元を通してかかわりの場を多く設けたことで、他者との多様な関係を築くことができた。体育授業ではじめて声をかけ合う新たな仲間の交流も生まれ、1年生なりに折り合いをつけながら仲間とうまくかかわり合う経験をたくさん積んだ。

C「子ども個々の不適應への対応」…集団適應が難しい子どもを放置せず、個々が抱える段差（不安）に、活動ごとにこまめに教師が共感して寄り添うことが必要になる。また、徐々に仲間意識が強まるチーム内では、ボールゲームをより楽しいものにしてやうという気持ちが子どもの中からも自然にわき上がってきたと考える。

D「確かな運動技能の習得」…子どものやってみようという思いを引き出しそれを中心に運動を仕組むことは有効である。また、風船を弾くという単純な動作を、ボールゲームに徐々に発展させたことも動きの質を確実に高める要因となった。授業後の「さあぶがうまくいってうれしかった」といった感想メモの中に、子ども自身の運動技能の高まりが実感として現れている。

最後に、単元前後に実施したQU（Questionnaire-utilities：学級診断尺度調査 [図書文化]）の分布図を以下に示す。（表5）体育科の一つの単元の実践を境に、子どもたちの学級集団への満足度が変容していることが分かる。

○拡散型の学級集団が右上のコーナーに集まる満足型に近づいている。

○実践前に学級生活不満足群であったM児は、満足群に移動し、単元終了時の感想で「○○さんといっしょにやったのしかったです。」「まけたりかったりして、たのしかったです。」と書いている。

○実践を通して、要支援群にいた4名のうち3名が満足群に近い位置に移動した。

これらのことから、指導上の工夫A～Dの、かかわり合いを意識した活動を仕組み、個々の運動能力を着実に高めていくことが、「よりよい学習集団」をつくりあげることに有効であると考えられる。他者との良好な関係構築と個々の運動能力の高まりは相乗作用があり、どちらも集団適應を向上させるための重要な要因になると考えられる。

集団所属の満足度は、もちろん多様な教育活動を重ね、ある程度の期間を要して作り上げられるものである。

だが、今回のように数時間の実践であっても、単元のねらいとなる運動技能を格段に高め、集団適應度を着実に高めることはできる。不適應や個人差を埋めきれず、学習集団づくりにつながりにくい他の体育学習においても、今回の実践をベース

に工夫する意義はあると考える。子どもの表現力・コミュニケーション能力向上を意識した取組もまだ不十分だと感じている。今後も、よりよい学習集団づくりを強く意識した体育授業の実践を積み重ねることで、子ども個々が学級を居心地のよい場所と感じ、他者と良好なかかわり合いをもちながら意欲的に学ぶ学級集団を実現していきたい。

参考・引用文献および注釈

- 1) 盛真由美, 尾崎康子 『幼稚園から小学校への移行における適應過程に関する縦断的研究』「人間発達科学部紀要」2 (2), pp.175-182, 2008
- 2) 馬場圭一郎 『今、子どもたちの遊びは』大修館書店「体育科教育47」1999 P10
- 3) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 体育編』東洋館出版社 2008
- 4) 中村和彦 『子どもの遊びの変貌』杏林書院「体育の科学49」1999 p25

表5

